

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・准教授

氏 名：末盛 慶

研究課題名：親の仕事生活・家庭生活と子どもの人格形成および家族形成

—ジェンダーと世帯構成の変動の中を生きる子どもたちのウェルビーイングと家族形成意識—

### 取り組み状況（2年間）

2013年の5～9月において、小平、鈴木、末盛の3氏を中心に研究会を開催し、研究課題の具体化と調査計画を検討した。検討の結果、2013～14年の2年間に、調査A、調査B、調査Cの3つの調査を実施することを決定した。

2013年度には、3つの調査のうちA調査を実施した。A調査とは本学の学生およびその母親を対象とした調査である。12月から調査を開始し、3月中旬に母親票、学生票のデータ作成が終了した。そのデータを受け取った小平、鈴木、末盛は多変量解析を含めた分析を行い、その結果をまとめたワーキングペーパーを完成させた。

2年目である2014年度は調査Bと調査Cを実施した。調査Bは名古屋市在住のひとり親とふたり親対象とした調査である。C調査は東海市にある幼稚園、保育園に子どもを通園させている夫婦を対象とした調査である。調査Bは11月に調査を実施し、2月末には調査Bのデータを用いた分析結果の報告を公開研究会というかたちで行った（日本福祉大学名古屋キャンパスにて開催）。

なお調査Cは調査Bと同時期に調査を開始し、12月には回収が終了した。データ入力を外部に委託しており、近日中にデータが完成する予定である。

### 研究成果内容

#### 1) プロジェクト目標の達成状況・成果内容

プロジェクトの成果としては、大きく2点があげられる。1点目は調査Aを実施し、本学の学生票および母親票に関する計量的データを収集し、かつこのデータを用いた分析結果をワーキングペーパーというかたちで形にできたことである。ここでは、母親の労働が脱標準化しているほど、貧困状態にあるほどワーク・ファミリー・コンフリ

クトが高まることが示され、現代の社会状況の変化が母親たちの生活状況を困難にさせていることが明らかにされた（本内容を用いた学会発表を末盛が行った）。

2つめは、ひとり親に関する調査Bを実施できたことである。近年、ひとり親世帯が増加傾向にあるが、ひとり親に関する量的研究はあまり行われていない。こうした中、ひとり親を対象とする無作為抽出法にもとづいた調査を実施した。本データを用いた公開研究会を2月末に開催し、そこでは様々な分析結果とともに、研究会の参加者からはひとり親や母子世帯支援の現場の状況や課題が示された。本公開研究会により、本研究プロジェクトの研究成果を学内外に示すことができた。

#### 2) 優れた成果があがった点

具体的に意義のある知見としては以下の2点があげられる。

1点目は、ひとり親世帯における貧困の再生産が確認されたことである。鈴木の実分析によれば、他の変数を統制しても、ひとり親世帯の子どもはふたり親の子どもに比べ進学期待が有意に低くなることが明らかにされた。この結果は近年指摘される貧困の再生産や子どもの貧困に関するエビデンスを提供しており、今後の分析が期待される。

2点目は、ふたり親に比べひとり親の方が、親のワーク・ファミリー・コンフリクトが子どもの家族イメージに否定的な影響を与えることが明らかにされたことである。小平の実分析によれば、ふたり親においては親のワーク・ファミリー・コンフリクトは子どもの家族イメージに影響を与えないが、ひとり親のワーク・ファミリー・コンフリクトが高いと、その子どもの家族イメージが有意に低下していることが明らかにされた。つまり、

ひとり親の仕事と家族生活の状況が困難であるほど、そこに置かれた子どもたちの家族イメージが低下するのである。ひとり親の就労環境を量的に検討する研究は国内では珍しく、ひとり親の労働政策および福祉政策に示唆を与える価値ある分析結果となっている。

### 3) 研究期間終了後の今後の展望

今後の目標として、3氏を中心として本プロジェクトで得られたデータを活用して、著作を刊行することである。現在、この著作に向け報告書の作成を進めている。4月に研究会を開き、今後の分析の方向性について検討を行っており、5月上旬に分析結果を共有する研究会を開催する予定になっている。

計画としては2015年度の前期中に、著作のベースとなる報告書を上記3氏を中心にして完成させる予定である。そしてその報告書ができ次第、出版社との交渉をはじめ、著作刊行に向けて動いていきたい。この著作以外にも、各氏の問題関心をもとつきながら、学会発表や論文投稿を積極的に検討する。

加えて、現在3氏でひとり親を対象としたインタビュー調査を実施している。量的なデータと現在とっている質的データを活用して、多面的にひとり親の家庭生活と仕事および子どもへの影響を明らかにしていきたい。今後も、今回の公募型プロジェクトで得られたデータや知見にもとづき、研究を精力的に進めていきたい。